

高田が有する歴史的強度、或いは風景を現実にかけている問題の解決に結びつけることはできなだろうか。高田は雁木や町屋などの歴史的建造物を大規模に持つ日本の中でも特異な街である。そこで高田のキーポイントは「集住」ではないだろうか。この「集まって住む」という原理こそ高田という都市を駆動してきたエネルギーではないだろうか。

確かに郊外の住宅地も集まって住んでいることにはかわりはない。大規模に開発したほうが収益が高いという経済合理性以上のものではない。対して高田の集住は、例えば協働で雪かきをする結のようなコミュニティを生み出してきた。つまり豪雪地帯で暮らすために人々が共に生きることを前提にした集住なのである。

地域社会の実質的な空洞化に地域社会圏なる概念をもって対処しようとする試みが始まっている。これは郊外における既存の建築が、「団地型」にしる「ニュータウン型」にしる「タワー型」にしる一建築的なまとまりが強すぎ、「地域」的としては分担的すぎて一体感を失うように機能してきたことへの反省から生じたものである。

例えば我々は高齢化社会と呼ばれる状況に直面しているが、既存の住宅がそのような社会状況に適応できているだろうか。今求められる住宅は、手摺やスロープを設置するというようなバリアフリーに留まるものではなく、互恵的な人間関係によって構成されるコミュニティを前提とするものである。コミュニティとは、何かを共有することによって自生的に生まれるものであるのではないか。例えば高田には雁木や町屋といった特異な構造物があるが、これらを共有することによって、共に使うことによってコミュニティが出来上がってきたのではないだろうか。ならば今後必要なことは保護・保存することに加え、雁木や町屋を共に使っているというアクティブな状態にすることである。

それには共有するものが今の生活そして将来の生活と結びついていなくてはならない。つまり生活上の問題(ライフスタイル)と社会的な制度・構造・建築(ソーシャルスタイル)が、ひとつの文脈によって関連付けられていることが必要である。その意義を考える上で震災について触れざるえない。

3.11 東日本大震災以降、隠れていた問題が一気に顕在化したといったほうが良いだろう。仮設住宅の問題から高田について考えてみたい。

被災地に建設された仮設住宅は住宅としての機能しか持たず、例えば居酒屋を営んできた夫婦が新たに仮設住宅で商売を始めようとしても店を構えるための敷地がな

い、もしくは建物が居酒屋に適していないなどの問題がある。もし高田の町屋の知見があれば、ミセ・チャノマ・ザシキというような空間構成の仮設住宅や各住宅を結ぶアーケードのようなものを建てることができかもしれない。こうした知見は仮設住宅に限らず、その後高台等に建てられるだろう復興住宅にも応用できるだろう。

今回の大災害は、自然現象との意味を大きく超えて現代日本が直面している諸問題を明確にした。人口の流出とコミュニティの崩壊は、震災により加速されたとはいえ、全国的な問題である。遅かれ早かれ私たちはその問題につきあたる。その時、有効な解答は既に今いる場所に、つまりは高田にあるのではないだろうか。

ではそのような問題に対処するための具体的方法があるのだろうか。私が提案したいのは建築のモデルを作ることである。ありふれた物であるかもしれない。

例えば仲町六丁目を対象にし、制度やしがらみから自由になり、最も暮らしやす様々な問題を解決できる建物をより自由に構築すること。そのモデルを実現しようとしたときに一体何が障害になるのかひとつずつ洗い出すこと。例えば法制度が障害になるかもしれない。市の条例あるいは国の法律、ひょっとすると憲法の改正すら必要になるかもしれない。或いは福祉サービスの限界が問題となるかもしれない。もしかすると既存の町屋建築が障害となるかもしれない。

つまり人間にとって最も生きやすい場所をまず始めに想定し、それを実現するため法制度など諸々の変更を考えていくということである。話が大きくなってしまっているかもしれないが、未来に向け自分たちがどのように生きたいのか主張・提示していくことでしかモノは動かない。そのような街こそ魅力と活気にあふれたものになると信じている。

早稲田大学大学院社会科学部
政策科学論専攻

修士二年 谷 夏樹